朝　日　遺　跡

1．調査の経過

朝日遺跡は沖積地を東西にのびる微高地に立地しており、標高は２～４ｍを測る。遺跡は弥生時代を中心として営まれ、大きく南と北の居住域、東と西の墓域に分かれており、その推定面積は70～80万m²におよんでいる。

本年度は東墓域内とその東側部分を、Ａ～Ｌ区の12調査区に分け、合計6214m²の調査を実施した。以下その成果について記述していくが、遺構・遺物の時期区分については先年度の「年報」に従い、Ⅰ～Ⅵ期の６時期に分ける。

2．調査の概要

62Ａ区　Ⅲ期に属する方形周溝墓が９基検出された。規模は径（周溝の下端長）３～７ｍの小規模のものばかりで、全て四隅が切れるタイプである。溝内供献と思われる土器がＳＺ04・10より出土しているが、点数は極めて少ない。Ⅳ期には方形周溝墓１基ＳＺ09が検出される。ＳＺ09は径８ｍの正方形をなし、南東隅に１ヵ所の陸橋部をもつ。ＳＢ01に関しては遺物の出土がほとんどなく、時期決定が困難であったが、Ⅲ～Ⅳ期にはいるものと思われる。遺構は周溝のみで、二重に廻る。外側の周溝で長径６ｍ、短径４ｍを測り、内側のものはそれよりひとまわり小さい。周溝は内側→外側の準に拡張するように作られているが、柱穴にはその痕跡はみられない。また、その他同時期の方形の落ち込みや周溝状の溝がいくつかみられたが、住居とは認定できなかった。Ⅳ期には溝２条ＳＤ01・02があり、その南を錯綜して走る溝群に繋がる。また、ＳＤ01の上・中層より多量の土器の出土がみられた。

62Ｂ区　Ⅲ期には方形周溝墓５基と多数の溝が検出され、そのうちの幾つかは方形周溝墓の周溝になるものと思われる。測定可能なものの規模はＳＺ02が径18ｍ、ＳＺ04が径10ｍ、

第１図　調査区位置図(1:7500)

第２図　Ａ区遺構図(1:600)

ＳＺ05が径７ｍを測る。ＳＤ01は上・下層に粘土・粘質土、中層に砂層（自然木を含む）が堆積しており、中層の時期に流水があったものと考えられ、下層上部よりⅥ期～古墳時代前期の土器が多量に出土している。ＳＤ02・03は近世以降の溝である。

62Ｃ～Ｅ区　Ⅲ期の方形周溝墓と周溝状の溝がＥ区まで検出されており、Ｅ区が東墓域の東端になるものと考えられる。調査区が小さく全貌が窺える方形周溝墓は少ないが、Ｃ区で検出された径８ｍのものを含めて小規模なもので占められている。Ⅵ期に属するものは土坑１基と溝１条がある。溝はＥ区を南北に走り、幅2.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。またＣ区より中世の不定形の落ち込みが検出されている。

62Ｆ～Ｊ区　この５調査区ではⅥ期～古墳時代前期の土坑・井戸状遺構・溝が散発的にみられるのみである。土坑の中でもＧ区ＳＫ02は、Ⅵ期の良好な資料の出土をみた。井戸状遺構はＨ・Ｉ・Ｊ区にそれぞれ１基づつ検出された。特にＩ区ＳＫ01では、上・中層より古墳時代前期、下層よりⅥ期の土器群が出土している。

62Ｋ・Ｌ区　遺構はまったくみられない。また地山高もＪ区以西に較べ20cm程低くなっており、東側になだらかに落ち込んでいくものと考えられる。

第３図　Ｂ区遺構図(1:600)

第４図　朝日遺跡弥生時代中期遺構図(1:6000)

C　区　全　景

G区K02土器出土状態

I区K01土器出土状態

3．まとめ

本年度の成果としては、まず中期に属する東墓域の東端が確認されたことがあげられる。これで東墓域の東西長は約600mとなり、南北（特に北側）が不明であるが、微高地上を東西に細長く伸びる墓域が想定される。またB区SZ02を中心とした方形周溝墓の一群は、61T・U区の大型方形周溝墓SZ01を中心とした一群とは距離が離れているため別単位かとも考えられるが、方向軸はほぼ同方向をむく。A区SB01が、墓域内の方形周溝墓が築かれない部分に単独で存在することは注目に値し、この住居の性格の解明が今後の課題となっていこう。

また、Ⅵ期～古墳時代前期の遺構はJ区まで続き、それ以東は遺跡がみられず、同時に朝日遺跡の東端が確認されたことになるわけであるが、この時期には縮小しつつあった南・北居住域との関係は不明であり、特に井戸状遺構のような生活に密着した遺構が存在することや廃棄土坑・溝が多いことを考えると、近隣に居住域があり、南・北居住域とはべつのグループがあったことが示唆されよう。

（宮腰健司）

第5図　I区SK01 上・中層出土土器

第６図　Ⅰ区SK01 下層出土土器